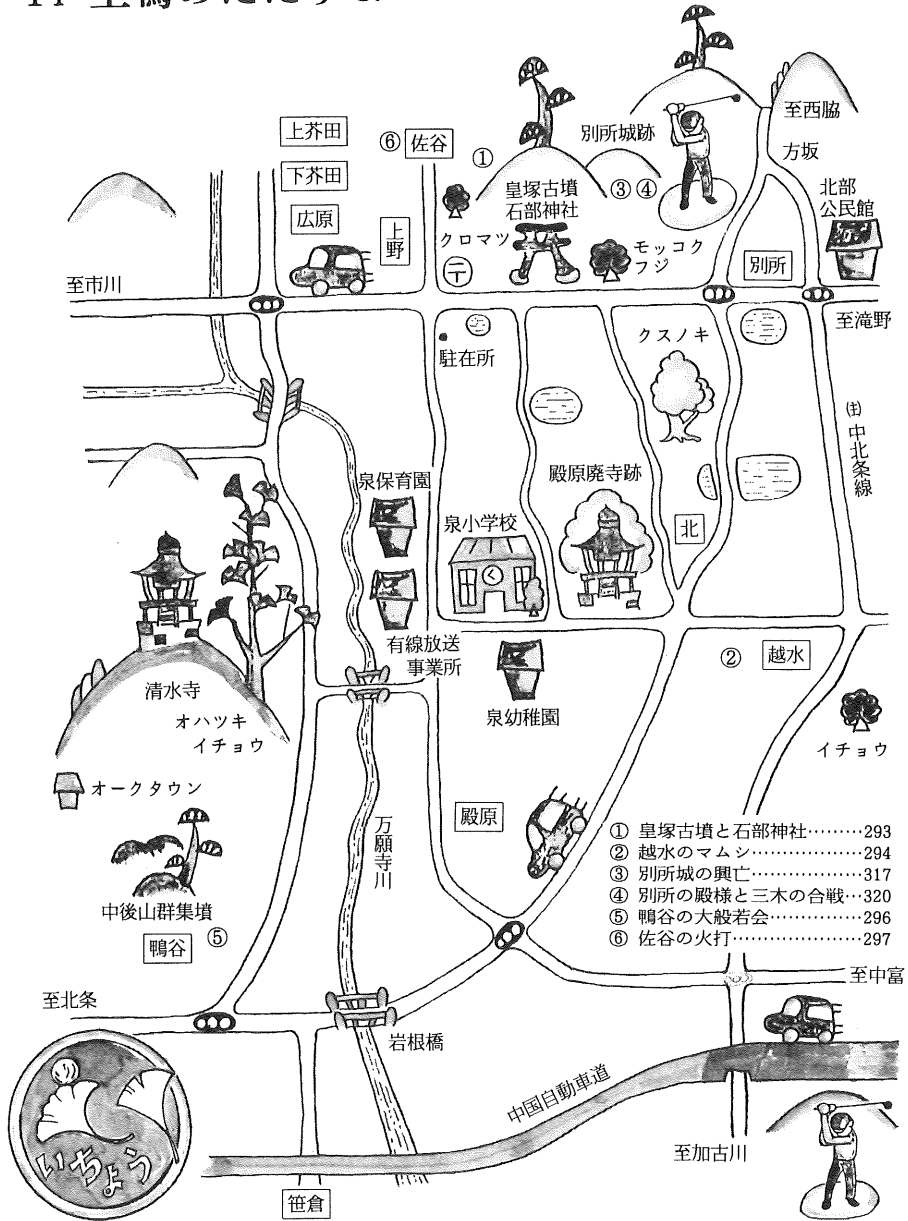


# 14 上鴨のたたずまい 7.5キロメートル



・御葉付イチヨウ（県天然記念物）

樹令数百年、目通り幹囲約四メートル、高さ四〇メートルでギンナンが葉に直接ついているめずらしいイチヨウです。種子が葉につくことは、植物の花は葉から分化したことを証明するもので、学術的に高い価値をもちます。

・石部神社の門杉（市天然記念物）

目通り四・五メートル、高さ三〇メートルにもたつする二本の大杉で、石部神社創建（七一九年）当時植えられたと伝えられる手植の千年杉です。

・皇塚古墳（市指定史跡）

古墳時代前期の山頂墳で、封土の流失も少なく、よく保存されています。石部神社の縁起では養老年間（七一九～七二一）に皇女を葬ったものと伝えられています。

・中後山群集墳

墳径一〇～一五メートルの横穴式円墳群で、十三基確認されています。古墳時代後期のもので、いずれも石室全長八～五メートルの大規模な古墳ですが、残念ながらほとんどが破壊されてしまっています。

・経塚古墳（市指定史跡）

山陽ゴルフ場クラブハウス北の丘陵頂上にあり、造成中に発見されました。長持型石棺二基を同円墳内に埋納した古墳時代中期の複合墳です。亀山古墳、皇家古墳、中後山古墳などと考えあわせると、この在田盆地が上鴨の里の中心地であったことがうかがえます。

・殿原廃寺

国分寺付近にあったと推定される白鳳時代（一三〇〇年以上前）の寺院跡。繁昌、吸谷の廃寺とともに、当時の豪族針間鴨国造が建立したものと考えられます。昭和の初め頃までは大きな塔の礎石が残っていましたが、京都へ売られてしまいました。石山寺の記録にある針間国賀茂郡既多寺はこの寺をさしているようです。

皇塚古墳と石部神社（上野町）

奈良平城の都の元正天皇の皇女さまが、「願かけ」のためはるばる安芸（広島県）の宮島・厳島神社におまいりになられました。

皇女さまには宮殿から、お供が七十人以上もつき、立派な船をしたててお参りになったといえます。皇女さまは、無事厳島神社でのお祈りをすまされ、帰路につかれましたが、あいにく海上が荒れもようので、たいそうお疲れになられたので、やむなく室津の港で下船されました。

三日間の休養をとられた後、陸路を進まれ、加茂郡船岡（現在の加西市中西町）の辺までお帰りになりましたが、船中でのお疲れが出て、ご病気になるれてしまいました。里人が集められ急いで仮御殿が造られました。

しかし、お供の人たちの手厚い看病のかいもなく、皇女さまは、「私の守り神は、厳島姫命の神様ですから、わたしが死ぬようなことがあれば、この地におむかえしておまつりして下さい」



といい残してこの世を去られました。

お供の人たちは、なげき悲しみながら、皇女のなきがらを姿の美しい三津山の頂上に葬りました。そして  
厳島姫命と皇女さまをおまつりする社をつくったのです。皇塚古墳はこの皇女さまのお墓であり、石部神社  
はおまつりするためのお社だといっています。

つき人たちは、それぞれみなこの地にとどまり、農業をしながら、皇女さまの冥福めいふくを祈るために、石部神  
社の守を続けたということです。その中の一人に、馬頭ばとう六郎兵衛という人がありました。皇女がなくなられ  
たことを大そう悲しんで、自分の髪を剃り落し、野原の中ほどにあった一本の大クスノ木の近くに小さな庵いおり  
を作って住み、皇女の乗られた馬を皇女の形見として大切にいたわりながら、皇女の冥福を祈ったとい  
うのです。

### 越水うてみのまむし（越水町）

ある日、西国さいごく行脚あんぎゃの弘法大師が、越水の村を通られました。

のどがかわいた弘法大師は、ある家で水を飲ませてくれるように頼みました。出て来たおばあさんが、

「さぞお疲れでしょう。さあ、早うここへ腰をかけて、お休み下さい」  
ときれいな冷水を出し、大そうにもてなしました。

この親切をたいへんうれしく思った弘法大師は、

「私は諸国を行脚かんぎしている者だが、何かお礼がしたい。今、困っているようなことがあれば聞かせてほしい」といいました。

おばあさんは、

「とんでもありません」

と辞退しましたが、少し考えて、

「この村は、ハメ（マムシ）がたくさんいて困ります」

とつぶやきました。弘法大師は、

「では、そのハメをこの村から追い払いましょう」

と行って、たち去りました。

それからというもの、この越水の村には、マムシがいなくなったという事です。

（広田京子氏収録の話より）



## 鴨谷の大般若会（鴨谷町）

毎年九月一日に、鴨谷町の誕生寺で大般若会がひらかれます。

大般若会は、仏教思想の根本を徹底して説いているといわれる大般若経を読み、祈願をする儀礼ですが、昔、村に疫病が流行した時、その病魔の退散と病氣平癒を祈念して行われたのが初めといわれています。

この大般若経は、六百巻からなるぼう大なお経です。久学寺から一箱に百巻ずつ入ったのを六箱借りてきます。この六百巻を全部読むことは不可能に近いので、経典のなかの重要な部分を繰り返して唱えながら経典をパラパラとひもといて全体を読んだと同じ意味をもたせます。

この大般若会で唱えられるのは「降伏一切大魔最勝成就」ということです。心の中の悪魔をすべて排除させるといことです。

当日、村中の各家庭からさし出す御布施は、なぜか、のしのついた祝儀袋を使います。昔は、大歳神社で行われていたので、その名残りでないかとも考えられます。

なお、大般若会の終わった後、村の入り口四ヶ所に、お札をおなご竹の先につけて立て、村の中に悪魔・疫病等が入らないように祈念してこの行事を終わります。

（定行定治氏の話より）

## 佐谷の火打ち（佐谷町）

佐谷町の真南は中富町にあたる。江戸期の中富は、村高（米の収穫量）が千石を越える大村であった。条里制（奈良時代の圃場整理）のためか、百戸にあまる人家は村のまん中に密集して軒と軒が接し、ちょっとした町のような感じがあった。したがって、ひとたび火事がおきると、火のまわりが早く大火になったという。

佐谷村からは、中富の火事がまるで絵のように見えた。そのためかどうかは不明だが、昔、佐谷村の人たちは、火打ち石の火をホクチに移すとき、「ナカトミ・ナカトミ」と唱えたという。

「中富村の火事のように、よくもえあがれ」との意味だったのだろうか。  
また一説に、「神事をつかさどった中臣<sup>なかつみ</sup>氏の使用する清い火だ」との見方もある。

（北播磨の伝説・吉田省三氏編著より）

